

はじまりの風景―宮沢賢治『狼森と箆森、盗森』考

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秦野, 一宏, HATANO, Kazuhiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15053/0000000115

【論文】

はじまりの風景—宮沢賢治『狼森と笹森、盗森』考

秦野一宏

1.

賢治は『注文の多い料理店』の「広告ちらし」の中で、『狼森と笹森、盗森』についてこう述べている。「人と森との原始的な交渉で、自然の順違二面が農民に与へた永い間の印象です」。この「原始的な交渉」をどう捉えるかが、この物語の読みと深く関わる。『狼森と笹森、盗森』は、西成彦の解釈によれば、「農耕文化がもたらした、森の生態系を破壊するはじまりの寓話」となり¹⁾、ここでは「三年間の牧歌的な異文化接触の中で、植民地主義は進行していき、その牧歌的なおおらかさは、所詮、表面的な被いにすぎないことが、徐々にしられていくしくみになっている」という²⁾。いったい、ここに描かれているのは、ほんとうに見せかけのおおらかさなのだろうか。そうなると「交渉」という賢治の言葉もまた、意図はどうあれ、欺瞞に満ちた見せかけにすぎないものになる。

一方、澤田由紀子は「交渉」を近代的交渉、つまり贈与・契約の観点から捉えた。たとえば澤田は、百姓たちが狼森のところに最初に栗餅をもってゆく場面をとりあげ、ここで「狼森と百姓には新たな契約が結ばれた」と指摘する³⁾。契約であるかぎり、贈り物（栗餅）を受け取ったならば、「その返礼を義務づけるメカニズム」が働くことになるわけで、ここでは百姓側の脅威にならないということが「返礼」となる⁴⁾。たしかに脅威は消えたかもしれないが、はたしてそれは「栗餅」というモノのおかげなのだろうか。あるいは、ここに働いているのは、ほんとうに、人間への脅威を抑止する「メカニズム」なのだろうか。そもそも「契約」などあったのだろうか。

西や澤田の図式を用いれば、原始的な交渉には不可欠であろう愛情（尊

敬)・愛着というものが入り込む余地がない。入植した年の冬には小さな子どもらは寒がり、小さな手を赤くはらして、「冷たい、冷たい」と言ってよく泣いていた。四つ森は、北風を防いでやったが、その泣き声はやむことはなかった。そのことを覚えていたのだろう、翌年の秋、土の堅く凍った朝、四つ森の一つである狼森は、寒さに震える子どもたちを森に招き、焼いた栗や初茸をご馳走する。子どもたちが火の方を向いてそれらを食べている間、狼たちはみな歌を歌って、火のまわりを「夏のまわり燈籠」のように走っていた。「狼森のまんなかで、／火はどろ／＼ぱち／＼／火はどろ／＼ぱち／＼、／栗はころ／＼ぱち／＼、／栗はころ／＼ぱち／＼」。この狼たち歌いながら火のまわりを走るシーンを谷本正剛は、「子供自身の心の絵」であると評している⁵⁾が、宜なるかなだ。「どろ／＼ぱち／＼」「ころ／＼ぱち／＼」という擬音語からは何ともいえぬ温もりが伝わってくる。さらわれたと誤解していた百姓たちも、子どもたちが手厚いもてなしを受けていたことを知ると、「お礼に」栗餅を作り、狼森に置いてきた。

森（自然）に寄り添った視点、語り口がこの物語に命を吹き込む。狼たちが百姓たちに断りなく、子どもを森に連れてきたことはたしかであるが、それを、注釈抜きで、子どもは狼たちに「かどわかされた」のだと、言い換えれば⁶⁾、この物語は瞬時にして人間中心のお話に変わる。賢治は「広告ちらし」においても、「森が子供らや農具をかくすたびにみんなは『探しに行くぞお』と叫び、森は『来お』と答へました」と、その筋書きを説明している。「かくす」と「かどわかす」では意味は大きくちがう。ここでの「かくす」には、「かどわかす」という犯罪、悪意をおおわせるニュアンスは寸毫もない。

自然と人間、その相互の理解で最も重要なのは、この愛情（尊敬）や愛着、あるいは礼（心からのお礼）というものではないか。狼森の見せたやさしさと百姓たちの感謝の念こそ、自然と人間の関係の基礎になるのではないか。わたしには、賢治がポスト・コロニアリズムやモースの贈与・交換の図式で読み解けるとはとうてい思えない。

賢治の言う「原始的な交渉」を感受するためには、西や澤田の図式から

こぼれ落ちる語りの細部に意を払わねばならない。なにより、黒坂森（語り手としての「巨きな巖^{いは}」）と「私〔「わたくし」とも表記〕」（聞き手、再話者）が連携して醸し出す微妙なトーンに耳を傾ける必要がある。

次の日から、森はその人たちのきちがひのやうになつて、働らいてゐるのを見ました。男はみんな鍬をピカリピカリさせて、野原の草を起しました。女たちは、まだ栗鼠や野鼠に持つて行かれない栗の実を集めたり、松を伐つて薪をつくつたりしました。そしてまもなく、いちめんの雪が来たのです。／その人たちのために、森は冬のあいだ、一生懸命、北からの風を防いでやりました。

「森」、「男」、「女たち」、みんなで仲良く主語を分かち合っている。このような自然の側からの感じ方は、柳田國男の『遠野物語』では示されることはない。『遠野物語』の語り手は、森でもなければ、森にすむ山人でもない、平地の人々である。民家の子どもをさらって、その子を食べたりするような『遠野物語』の恐ろしい山男はまさに、彼を見慣れぬ者、異様な者として遠ざける人々の眼によって生みだされたものにちがいない。『狼森と策森、盗森』は違う。ここではすべてが、山男たちを含みこむ森の視点から語られている。

森は風を防いでやっているが、その見返りをまったく求めてはいない。ただ森は、窮境の中「きちがひのやうに」懸命に働く人々の姿に何かを感じ、「一生懸命」助けただけだ。ここで働いているのは森の原初的な感情である。森は「北からの風を防いでや」ったと、語り手である黒坂森は言っている。ところが、たとえば西成彦はその内容をこう言い換えている。「最初の冬を迎えた開拓者たちは、天然の要害である森によって北風から守られ、男四人、女三人、子ども九人の人員を保持したまま、春まで生き延びる⁸⁾」と。おそらくこのような人間中心の記述の仕方は、西が、この物語を人間側から、「農耕文化がもたらした、森の生態系を破壊するはじまりの寓話」とであると解釈していることと関係している。加えて日本語そのものにも問題がある。波が人々を襲った、というような人間を攻撃する自然は

別にしても、森が人間のために風を防いだ、というような自然が意識的に人間を守ってくれることを伝える言葉は、どうにも日本語になじんでこなかったのだ。しかし、賢治はあえてそのなじまぬ領域に踏み込んでくる。その人たちは森によって北風から守られたのか、それとも、森はその人たちのために北風を防いでやったのか、主語をどちらにするかによって物語は、まったく別のものになる。

百姓たちは森にかこまれた小さな野原で畑をおこすこと、家を建てること、火をおこすこと、木を少しもらうことの許可をもとめ、色よい返事もらった。この時の森は四つともまだ固有名をもたず、未分化のままの森である(おれはおれ、というかすかな意識の芽生えはあったが)。とはいえ、未分化の森にあるものは、多少とも分化した森にもある。言い換えれば、後に盗みをはたらく盗森にも本来的に、やさしさは備わっているのである。のちに盗森と呼ばれるようになる森も、他の森と一体となって、寒さに凍える人間のために北風を防ぎ続けていることを忘れてはならない。

『狼森と策森、盗森』の最大の特徴は、黒坂森の「形」である「巨きな巖」を語り手にしたことである。語り手が森であるからこそ、森の視点を入れることができ、同時に森が「巖」であるからこそ、壮大なスケールで時をまたぎ、はるか彼方の過去と＜今＞を地続きで結びつけることができるのだ。その発想はじつに大胆、ユニークで、ここには、人間の視点しかもてず、近い過去との結びつきしかもてない『遠野物語』とはまるで異なる時空が広がっている。

もう一つ言っておかねばならないのは、この黒坂森の話が、その内容に関して中立的ではないということ、屈折があるということだ。語り手が森だからというだけではない。「この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すつかり知つてゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巖が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました」。黒坂森(巖)の話は自慢げに、「威張つて」話されたものなのだ。

賢治は自然を美化しない。『よだかの星』には、星になりたがっているよだかに、「星になるには、それ相応の身分でなくちゃいかん。又よほど金も

いるのだ」と、さもしいことをもったいぶって論ず、人間くさい星が登場する。『よだかの星』だけではない、賢治の世界にあっては、何もかもがみな生きており、その心性において人間と峻別できない。神さまだって人間と同じく生臭く、恋もすれば、やきもちも焼く（『土神ときつね』）。境界線はどこにもないのだ。黒坂森も自身の話の当事者であるかぎり、語り手としていかにあるがまま、客観的に話そうとしても自己執着、自身の美化から逃れられない。おもしろく話したいという思いもあろう。威張って独りよがりの話をして、それだけでは誰も聴いてくれないからだ。とはいえ、慣れぬ者が話をおもしろく脚色しようとする、どうしてもぼろがでる。

黒坂森（巖）は語り手として、格調高く、名前由来譚という古風なスタイルをとろうとするが、うまくいかない。地名伝説の常道から言えば、狼森は、そこに狼がいたから狼森と呼ばれ、箆森は箆に農具を隠したから箆森になったと話を運んでゆくべきなのに、黒坂森の場合は、狼森に行ったらそこに狼がいたというトンチンカンな話し方で、これでは命名の由来を語る説明になっていない。話をするに慣れていないのか、黒坂森はどうやら、細部をおもしろく語ろうとして全体の論理を後回しにしまったようだ。その知ったかぶりは何とも愉快である。百姓たちが盗森に入っていく場面では、盗森の名前の由来がまだ語られていないにもかかわらず、百姓たちは、この森は名前からして盗人くさいと言って入ったという。どうやらこの齟齬を聞き流す「私」もいい加減で、この奇妙な話の持っているように気づいていないふしがある。それどころか、この聞き手である「私」は、読者相手の語り手として積極的に介入し、話を屈折、改変さえる。「ずうつと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすっかり埋まりました。このまつ黒な巨きな巖も、やつぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのださうです」。巖は実際には、おれは跳ね飛ばされたと断言していたのだろうが、「私」は、そこに「ださうです」を加え、自身の話が伝聞であることを読者に意識させる。以下に続く語りでは、伝聞表現はしばらく現れない。しかし実際には隠れた「ださうです」が延々と続くのだ。そして読者（聞き手）が、話が伝聞であることを忘れた頃、すなわち、なくなった栗を捜しにやってきた百姓たちが、栗を

返してほしいと黒坂森の入り口で呼びかけるくだりになると、「私」は再度、話に介入してくる。

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたへました。／「おれはあけ方、まつ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た。もう少し北の方へ行つて見ろ。」そして栗餅のことなどは、一言も云はなかつたさうです。そして全くその通りだつたらうと私も思ひます。なぜなら、この森が私へこの話をしたあとで、私は財布からありつきの銅貨を七銭出して、お礼にやつたのですが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしてゐますから。

ここでの「私」の意見はどう受け取るべきなのだろう。「全くその通りだつたらうと私も思」うという、黒坂森に対する「私」の評価をそのまま信用して、黒坂森は毅然としており、人間の側にすり寄ろうとしていないのだと考える評者もいる⁹⁾。しかし、なくてもいいような「私」による裏書は、あるとむしろ逆の効果を生んでしまうのではないか。強調すればするほど、そこにはきっとわけがあるのだらうと、勘ぐられるのだ。

「私」の言葉はのちのキュースト(『ボラーノの広場』)の言葉と同じように、必ずしもそのまま信用できない。意識的に嘘をつくということはないにしても、自身がそう信じているだけだということもある¹⁰⁾。黒坂森が「仲々」お金を受け取らなかったことは、必ずしもこの森の「気性がさっぱりとしてゐ」ることと結びつかないのだ。ほんとうにさっぱりしているのであれば、金など断固受け取らないという選択もあったはずである。黒坂森が栗餅を要求しなかったことは事実であっても、おれは「栗餅のことなどは、一言も云はなかつた」と、わざわざ自分から言っているところから推して、ほんとうに栗餅が欲しくなかったのかどうかは疑わしい(実際、事が収まったあとにはちゃっかり栗餅を受け取っているのだから)。賢治は、黒坂森も「私」も、完全に客観に立てる者として設定していない。つまりはこの物語は絶対的な支柱を欠き、何が真実かは、読者自身で見分ける必要がある、ということになる。脱線、冗長、屈折の中、揺らぐ言葉の中に

こそ、作者のニュアンス含みの重要なメッセージが隠れている。

黒坂森から聞いた話は、『鹿踊りのはじまり』や『サガレンと八月』、『氷河鼠の毛皮』のような風から聞いた話とは、まったく違う。風は、黒坂森のように話の内容に直接関与する登場者ではないので、これはおれしか知らないことだなどと、他の登場者たちと知識を競い合うこともない。また、『鹿踊りのはじまり』や『氷河鼠の毛皮』の「私」（あるいは「わたくし」）は、『狼森と策森、盗森』の「私」のように、話してくれたことに対して相手に「お礼」を渡すなどという行動をとることもない。

金銭の授受をめぐるこの黒坂森と「私」の関係はじつにおもしろい。もちろん、話の「お礼」の七銭は、かつての百姓たちのお礼の栗餅に相当するのだが、栗餅が銅貨になったという時代の変化だけが問題になっているのではない。興味深いのは、時代の変化にもかかわらず、七銭にも、栗餅と同じように、感謝あるいは親愛の気持ちが込められているということだ。

七銭とは当時の価値で団子が二串か三串買える程度のわずかの金ではあったけれど¹¹⁾、それが「私」の「ありつきの」金であった。この「ありつきの」は、なかなか相手が金を受け取らない、「さつぱりとし」た性格であるという事実を伝えるためにはまったく不必要な言葉である。この「ありつきの」を加えることで浮かび上がるのは、「私」の側からのお礼の性格であろう。物語をしてくれたことに見合う謝礼金はいくらなのか、という付度は無用だ。値はつけられない。この「ありつきの」という言葉は、自身の善良さをつい強調してしまったとも受けとれぬことはないが（ひねくれた解釈だ!）、それ以上に、七銭が、等価交換を超えた、純粋なお礼であることを示している。その語り手の気持ちは、『祭りの晩』の山男や亮二のお礼をめぐる感覚を想起させる。お腹がすいて団子二串無銭飲食して村の男たちからいじめられていた山男を見、かわいそうに思った亮二は「ただ一枚残った」白銅（五銭硬貨）を山男にあげる。こうして窮地を救われた山男は、そのお礼に大量の薪と栗をもってきた。その法外なお礼に対し、亮二のおじいさんは、今度夜具と団子を持って行こうと、等価交換的、現実的な提案するが、亮二は、「もっともつといふものをやりたいな。山男が嬉しがって泣いてぐるぐるはねまはって、それからからだが天に飛

んでしまふ位いゝものをやりたいなあ」と言う。この亮二の考える「いゝもの」は『狼森と策森、盗森』の語り手である「私」の「ありつきの」の銅貨と同じ意味をもっている。

この「お礼」は『どんぐりと山猫』における山猫のお礼とはまったく違う。山猫はどんぐり裁判の助言のお礼として、一郎に黄金のどんぐりを手渡す。なぜお礼をするかといえば、そうしなければ自身の人格に関わるからである。「いゝえ、お礼はどうかとつてください。わたしのじんかくにかゝりますから」。山猫にとっては、黄金ではなく、黄金に見えるどんぐりが一升あればいい（「一升にたりなかったら、めっきのどんぐりもまぜてこい」）。ここで問題になっているのは相手への素朴な感謝ではなく、世間体、自身の品位下落への心配である。ここでは本来のお礼が形骸化し、見せかけるために利用される「礼儀作法（コムイルフォー）」となってしまう¹²⁾。このコムイルフォーと、百姓たちの狼たちへの「お礼」や「私」の黒坂森への「お礼」を混同してはならない。

2.

「原始的な交渉」は単なる取引ではない。「交渉」は相互の働きかけであり、人間からの働きかけは森にとって精神の糧となる。人間がまだ係わらない頃にも、森たちはちゃんと生きていたが、生きる喜びを十二分に味わっていたかという、どうもそういうわけでもないらしい。黒坂森（巖）は、人間がやってくる前の四つの森の姿をこんなふうに語っている。

〔岩手山の〕噴火がやつとしづまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、たうたうそこらいつぱいになり、それから柏や松も生え出し、しまひに、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思つてゐるだけでした。

「おれはおれ」の自足状態、自己意識の希薄な一種朦朧としたような状態にあった四つの森たちは、このあと、人間たちと係わることで自己に目

覚めてゆく。まず森は人間のために風を防いでやるが、このように誰かのために何かをすることによって自身の存在意義が感じられてくる。寒さでふるえる人間の幼児を見ると、憐憫の情が湧きあがる。「狼森」は、自分たちが与えた温かいものを食べている幼児たちを見て、どのようなことを感じただろうか。その詳細はわからないとしても、これまでに体験したことのない感情が激しく動いたことはまちがいない。そうしたはじめて味わう感情は、狼森に生きているという実感を呼び起こす。人間によって名前がつけられたことも、自己意識が高まる機縁になったはずだ。また人間と深く交わることで、森たちは好奇心や欲望など、より複雑な感情に突き動かされるようになる。深層に働く自我執着心が現れ、森たちは、この生きていくための根源的エネルギーとなる＜執着心＞によって充実した生命感を手に入れることになる¹³⁾。誰も味わったことない初めての食べ物（人工物＝栗餅）を誰かがもらったと聞き込むと、自分も無性にほしくなる。きつとほっぺたが落ちるほどおいしいのだろうかと、その味を想像すると、俄かに欲望が湧きあがる。

こうして森は、人間と関わることで新しい原初の自然、「おれはおれ」というだけではない、欲望をもった素朴な＜子ども＞に生まれかわる。入植三年目、栗を盗まれた百姓たちが狼森と山男のもとを訪れる場面では、その新たな＜子ども＞の姿が鮮明に示されている。

みんなは、てんでにすきなえ物を持つて、まづ手近の狼森に行きました。／狼共は九疋共もう出て待つてゐました。そしてみんなを見て、ツツと笑つて云ひました。／「今日も栗餅だ。こゝには栗なんか無い、無い、決して無い。ほかをさがしてもなかつたらまたこゝへおいで。」／みんなはもつともと思つて、そこを引きあげて、今度は箴森へ行きました。／すると赤つらの山男は、もう森の入口に出てゐて、にや／＼笑つて云ひました。／「あはもちだ。あはもちだ。おらはなつても取らないよ。栗をさがすなら、もつと北に行つて見たらよかべ。」

狼の「今日も栗餅だ」と山男の「あはもちだ。あはもちだ」という言葉

から透けて見えるはしゃぎぶりは、どう見ても、栗餅に執着する、無邪気な子どもの反応である。何か事件が起こったらしい、じゃ今日も栗餅がもらえるぞ、というわけだが、彼らは自身の湧きあがる感情を隠しておけずに、つい口にしてしまう。狼が「フツと笑」うのは、二年目の「みんなまじめな顔をして、手をせわしくふ」る場面と、山男が「にや／＼笑」うのは、やはり二年目、いたずらをやめてほしいと言われ、「大へん恐縮したやうに、頭をか」く場面と呼応する。この「フツ」と笑いながら「今日も栗餅だ」というあたりは、「人間への、アイロニカルな批判」を見る評者もいる¹⁴⁾。あるいは生態系の破壊という、現代においてあまりにも深刻化した重い問題が、細部を見えなくし、人間＝加害者・悪者というパターン化された認識へと短絡させるのかもしれない¹⁵⁾。

狼や山男が笑うのは、わたしに言わせれば、人がいいから、善良だからである。いや、それだけでは言い足りない。狼や山男は底抜けに純朴で、底抜けに人がいいのだ。その純朴さは、「悪く思はないで呉ろ¹⁶⁾」、「おらさも栗餅持つて来て呉ろよ」、「～よかべ」といった、彼らの使うやわらかな方言からも滲み出る。斜に構えた皮肉など、山男や狼たちにはまったく似合わず、あろうはずもない。

原初の森たちはみな、子どもの心をもつようになる。農具を隠した山男は、策の中に隠れていたが、百姓たちがやってきて策をのけると、大きな口をあけてバアと言う。これは、幼子の好きなかくれんぼ遊びを模しているのだろうが、彼はもう、気恥ずかしさをまぎらわそうと懸命なのだ。今後はいたずらしないようにと諭された山男は、しばし「恐縮したやうに」頭を搔いて立っていたが、百姓たちが帰ろうとすると、「おらさも栗餅持つて来て呉ろよ」と叫び、「手で頭をかくして」逃げてゆく。自分も百姓たちと仲良くなって、栗餅がほしい。しかし恥ずかしがりやの山男は、その気持を正面きって伝えられない。そこで閃いたのだ。自分も狼たちのように百姓たちの大事なものを隠して、あとで返せば、良好な関係がもて、栗餅も手に入るのではないかと。熟慮の上での行動ではない。盗森が栗をとってゆくのも、岩手山の言うように「じぶんで栗餅をこさへて見たくてたまらなかつた」からで、後先のことなどまったく考えてはいない。まさに子

どもの行動だ。

ただ黒坂森だけは、子どもであってもいささか毛色が違う。彼は一郎『どんぐりと山猫』のように、大人であろうとする、いわば背伸びした子どもである。自身を抑えて、なかなか本音を明かさない。これは、他の森たちと比べ黒坂森だけが、百姓たちの前に「形」を出さないことと結びつく。

賢治の「形」には表情をもった顔がついている。レヴィナスは自著『われわれのあいだで』の中で、「事物は顔をもちうるのか」と問いかけ、「芸術とは、事物に顔を付与する営為ではなかろうか。家の正面、それは私たちを見つめているのではないだろうか」と問いかけている¹⁶⁾が、このレヴィナスの「芸術」に相当するものこそ、賢治における「形」である。ここでの「形」とはそれぞれの本音、欲望をはっきりと目に見えるように具現化したもの、我々人間を見つめるものだ。この喩、イメージの付加、視覚化に賢治の独創がある。狼森では九匹の狼が、策森では山男が、盗森では「まつくろな手の長い大きな大きな男」がそれぞれの「形」である。

一方、黒坂森の「形」は生き物ではなく石、巨きな巖である。この巖は語り手の「私」には形を見せるが、百姓たちには見せない。たとえば、百姓たちが黒坂森に栗を盗んだ者を知らないかと尋ねにいくと、黒坂森は「形を出さないで、声だけでこたへ」る。

狼森や策森は「形」を出すこと、すなわち、自身の固有の表情を丸出しにすることに躊躇しないが、他の森よりちょっとませた黒坂森には自身の「形」をだすことへの恥じらいがある。別役実は黒坂森の特徴を「分別」という言葉で言い表している¹⁷⁾が、まさに黒坂森には他の森にはない「分別」があるのだ（ただしどこまでも＜子ども＞の分別ではあるが）。黒坂森が他の森のように人々に対して「いたずら」や「悪いこと」をしなかったのも、盗森の犯行を暗に人に教えたのも「分別」ゆえである。分別ある黒坂森は知識を誇るだけでなく、おもしろく語ろうと表現も工夫する。

みんなは黒坂森の云ふことが尤もだと思つて、もう少し北へ行きました。／それこそは、松のまつ黒な盗森でした。ですからみんなも、「名からしてぬすと臭い。」と云ひながら、森へ入つて行つて、「さあ栗返せ。

栗返せ。」とどなりました。

身ぶり、手ぶりの入った講談や紙芝居を想わせる「それこそは」という言葉は、そこが話のクライマックスであることを大仰に告げている。それまでも、百姓たちの開拓、作物の出来がよかったり、何かうまくいったりした場合、百姓たちの喜びのあとには、必ず、不思議なこと、何かしら災難のようなものが降りかかる（「ところが」「やっぱり…」など、明らかに読者の予期していることをちゃんと認識している）。しかもその喜びが大きくなってゆくにしたがって、災難の結果もややこしいものになって行く。百姓たちの災難に対する態度も変わってゆく。これも話を面白く語るテクニクなのだろう。「ですから」という順接の接続詞の奇妙な使い方もおもしろい。また盗森をわざわざ「松の真つ黒な」と形容し、黒を強調するのは、単に百姓たちの盗森への先入見だけでなく、話を盛り上げようとする語り手の性格も、同時に浮彫りにされていると考えるべきだろう。

黒坂森には狼森や策森にはないもったいぶり、気取りがある。「おれはあけ方、まつ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た。もう少し北の方へ行つて見ろ」。これはなくなった粟を捜す百姓たちへの黒坂森の助言だが、方言まじりの狼森や策森の言葉とはまるで調子が違う。「まつ黒な大きな足」に言及した彼の言葉は遠まわしではあるが、なにかしら告げ口臭い。犯人を直接、名指しはしないけれども、盗森が犯人だと言っているかのような伝え方である。しかし、告げ口をしたらろうと問い詰められれば、自分は「まつ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た」と言っただけで、盗森が犯人だと言い募ったおぼえはないと突っぱねるだろう。彼は知恵にはしこく、いい子ぶってはいるが、先生に気にいられるような、＜いい子＞そのものとはとても言いがたい。

3.

『狼森と策森、盗森』という物語は、すでに述べたように、はじまりが扱われている物語であるが、次にその＜はじまり＞を＜礼儀作法＞から見ていきたい。

農民たちは何か事件が起きるたびに栗餅をもってゆく。西成彦はこの行為を捉えて、こんなふうにする。「ひっこし蕎麦ならぬ栗餅の供物ひとつで、耕作地の借用（基地・駐屯地の占拠）を正当化する農民たちの礼儀作法は、ほとんど詐欺的といっている¹⁸⁾」。どうして詐欺的なのか。いつかは百姓たちも礼儀を形骸化させ、栗餅をもってこなくなるのかもしれないけれど、〈所詮人間は…〉という性悪説に立った未来からの悲観主義的な見方から、はじまりの礼儀にかなった行為を詐欺的と断ずるのは、わたしには的外れのように思われる。

小森陽一もまた唯物論的観点から、百姓の「お礼」に疑義を呈している。小森によれば、狼は肉食動物なのだから「栗餅」よりも、柔らかな肉をもった小さな子どもたちの方が、ずっと食物として喜んだはずだというのだ¹⁹⁾。これは、わたしにはブラック・ジョークとしてしか受けとれない。礼というものはいくまで、こちら側の大切なものを与え、深い感謝の意を伝えるためのものではないのか。百姓たちにとって栗から作った栗餅は、まさにそうした意味をもっていた。相手側の好みに振り回されては、感謝の気持ちも萎えてしまう。賢治が問題にしているのは礼が本来もっている精神性である。『論語』には、「礼と伝い礼と伝うも、玉帛を伝はんや」という言葉があるが、本来の礼は玉帛—贈り物の質—によって左右されるものではない。

澤田由紀子は、「贈り物を受け取ったならば、その返礼を義務づけるメカニズム」（モース）を利用して、百姓たちは「お礼」の効果を狙っていると見ている²⁰⁾。そしてたとえば、二年目の策士の事件のようす、特に、手をせわしくふりながら、ここに捜しものはない、ほかを捜せと言う時の狼たちの「まじめな顔」に、栗餅の抑止の効果が表れているとする²¹⁾。しかし、自然を手なずけるだとか、飼いならすだとか、そんな近代的な発想は、ここに登場する百姓たちにはまだない。狼たちの「まじめな顔」も、栗餅の効果、「贈与により強いられたい返礼」ではない。「まじめな顔」は卑屈のしるしではないのだ。これは一年目の「悪く思わないで呉ろ」という言葉にあふれていたもの、装いのない、底抜けの人の善さを表わしているだけだ。手をふりながらのまじめ顔は、栗餅をもらってより懇意になった証し

であって、けっして強いられて<作っている>わけではない。

栗餅を渡す側も効果を狙っているわけではない。狼森だけではない。策森に対しても、盗森に対しても、あるいは黒坂森に対しても、栗餅はみな底意なく、単純に「お礼」として手渡されているのではないか。栗餅を「情報の代価」や「誠意の等価価値」と解釈できるような四角四面の関係になるのは、はるか後のことではないか。賢治がここで描いているのは、<大人の>常識の一手手前なのである。すでに触れたように、子どもたちを捜しに来た百姓たちに向って狼森は、「悪く思わないで呉ろ」と言う。

「悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはうちに帰ってから栗餅をこしらへてお礼に狼森へ置いて来ました。

悪く思わないこと。これは互いの関係を良好に保つための絶対の条件であろう。この言葉は、物語の終盤に登場する岩手山の口からも出る。「栗はきつと〔盗森に〕返させよう。だから悪く思はんで置け」と。相手のことを悪く思わないこと、相手に悪く思われたくないと願うこと、—これが森と百姓たちの「原始的交渉」の原則であった。

『かしはばやしの夜』でも自然と人間関係が扱われているが、状況はまるで違う。自然から悪く思われようが思われまいが、清作にはもはや関係ない。柏の木大王にしても、清作たちに悪く思われたくないなどとは、まったく思っていない。人間と自然、両者の関係はすでに変質している。何よりここには山の所有者である山主がいて、『狼森や策森、盗森』にはなかった権利の主張がある。木は、山主の藤助が所有しているものであれば、藤助に伐った木の見返りを渡さなければならないが、木を伐っても、清作にはもはや森や山に礼を言う「いはれ」がない。柏の木大王から、おまえは「前科者」だ、おまえの斧のあとがついた「九十八の足さき」が証拠として残っていると責められても、臆するところはない。「あつははは。おかしなはなしだ。九十八の足さきといふのは、九十八の切り株だらう。それがどうしたといふんだ。おれはちゃんと、山主の藤助に酒を二升買つてあ

るんだ」。人間は、人間が決めたルールに従うだけでいい、自然の側の言い分など、耳を傾ける必要はないと清作は信じているのである。ここにはもはや原始的な交渉などない。こうなると、すべては人間同士の力配分や取り決めで分割しうるものとなり、大地だけでなく空にも海にも権利が生まれる。宇宙にすら境界線が引かれることになるかもしれない。

『狼森と策森、盗森』の世界は違う。狼森たちはいくら粟餅がほしいといっても、それをもらうことが当然の権利だなんて、まったく思っていない。盗森にしても、もとはといえば、森の援助を得て作った作物なのだから、粟を自分のものにすることは自分の権利だ、などとは思わない。それこそ、岩手山の言うように、「盗森は、じぶんで粟餅をこさへて見たくてたまらなかつた」だけなのだ。小森陽一によれば、粟の所有があるから盗森の盗みが成立する。すなわち、『盗森』が『盗森』であるのは、『百姓』たちの社会が、盗人を発生させるような段階に達したことのあらわれだということになる²²⁾。しかしそれはあくまで、大人の眼（＝近代社会の眼）から見た論理であろう。続橋達雄は言う、人間の日常生活では許されるものではないが、ここでの盗みの行為は「その動機の無邪気さゆえに、あたたく見られている」²³⁾と。わたしは続橋の考えに与する。原初の自然は子ども、なりは大きくても盗森もまだ子どもなのだ。子どもはそこにたまらなく欲しいものがあれば、自分を抑えられず、ひよいともってゆく。そのプリミティブな行為はまだ、悪として断罪されるものではない。

百姓たちも、「悪く思はんで置け」という岩手山の言葉を受け入れる。「みんなはあつけにとられてがや／＼家に帰つて見ましたら、粟はちゃんと納屋に戻つてゐました。そこでみんなは、笑つて粟もちをこしらへて、四つの森に持つて行きました」。百姓たちは、いったいどういうことだと自問することもない。粟はちゃんと戻っている。それで十分。どうやって戻ったのだらうなんて、考えもしない。戻ればそれでOKで、百姓たちの顔にはからりとした「笑い」がこぼれる（後述するように、しこりは少しは残りはするが……）。

原初の世界では人間も森も、個としての意識はなくはないが、突出した個性などはない。百姓たちと森たちは、純粋に個と個の関係ではない。まだ百姓たちは一体で、森も、微妙にくずれかけ、個別化してきてはいるけれども、まだ一体である。

四人のけらを着た百姓たちが、のっしのっしと、森に囲まれた小さな野原にやって来る。読者は開拓者たちの中心にいる四人の百姓の名も知らされなければ、違いも説明されない。背格好などの体の特徴もいっさい触れられない。先頭にたってやってきた百姓が、「俺はもう早くから、こゝと決めて置いたんだ」と口火を切ると、別の百姓が地味もさほど悪くはないなと同調する。三人目の百姓が、それではいよいよここときめるかと問いかけると、いままでだまって立っていた四人目の百姓が、よし、そう決めようと結論を出す。それらの言葉は、話者を個性化するというほどのものではない。互いに話し合うというのではなく、まるで四人が一体となって、長い独り言の分担されたパートをしゃべっているかのような趣である。時とともに子どもたちが新たに生まれ、畑も小屋も増えてゆくが、誰の子どもか、誰の畑か、誰の小屋かは問題にされない。みんないっしょに生きている。

野原に畑を起こすことへの許可を求めて森に呼びかける場面では、四人の百姓たちは＜みんないっしょに＞言葉を発する。＜みんな順々に＞でもなく、＜みんなばらばらに＞でもない、＜みんないっしょに＞である。

『かしはばやしの夜』では、画かきが「みんな順々にこゝに出てきて歌ふんだ」と誘い、梟の副官は「みんな一しよにおどりませう」と呼びかける。ここには「順々に」と「一しよに」という、集団としての二つの行動原理が提示されている。画かきが体現するのは、喜びを背景にした個性の発現で、彼はなにより「自分の文句で自分のふしで歌ふ」ことを重要視する。一方、梟の副官が提案するのは、みんなが一体化する喜びである。副官が歌えば、柏の木が両手をあげて反り返ったり、頭や足を天上に投げ上げるようにして懸命に踊り、それに合わせて梟も羽を開いたり閉じたりする。互いに合わせ、つながることの喜びがここでは主張される。大掴みに言えば、前者が近代的なルール、後者は原初的なルールと言えようが、『狼

森と策森、盗森』では、原初的なルールがぎりぎり守られている。

ただ小森陽一のように、『狼森と策森、盗森』において、この原初的なルールがすでにして破られていると考える評者もいる。小森が問題にするのはくみんなばらばらに＞なること、言い換えれば、私的所有と人々の個別化である。氏は、入植後三年目、粟が盗難にあった時、四人の百姓はもはや「声を揃へる」こともせず、「てんで」に叫ぶと述べ²⁴、このことをもって、『狼森と策森、盗森』が「私有財産の起源をめぐる物語」である証左としているのだが、その「てんで」に叫ぶ、つまりは、百姓たちがこの時点でばらばらになっているという指摘そのものを検証してみたい。細かなことかもしれないが、賢治にあってはどんな細部もおろそかにはできないのだ。まず、問題の部分のを他の森への呼びかけの部分と比べてみよう。入植してきた秋には、四人の百姓について、こう記されていた。

① そこで四人の男たちは、てんでに^{よつたり}にすきな方へ向いて、声を揃へて呼びました。／「こゝへ畑起してもいゝかあ。」／「いゝぞお。」森は一斉にこたへました。／／みんなは又呼びました。／「こゝに家建てゝもいゝかあ。」／「ようし。」森は一ぺんにこたへました。／／みんなはまた声をそろへて^(ヤマ)たづねました。／「こゝで火たいてもいいかあ。」／「いゝぞお。」森は一ぺんにこたへました。／／みんなはまた呼びました。／「すこし木貰つてもいゝかあ。」／「ようし。」森は一斉にこたへました」

「みんな」(四人の百姓)の声を揃えた叫びに対して、森は「一斉に」(「一ぺんに」)こたえている。この頃の森たちにはまだ名前もなく、めいめい勝手に、「おれはおれだと思つてゐる」だけであつた。翌年の秋、百姓たちは、消えた四人の幼い子どもたちの行方を森に尋ねる。

② みんなはまるで、気違ひのやうになつて、その辺をあちこちさがしましたが、こどもらの影も見えませんでした。／そこでみんなは、てんでににすきな方へ向いて、一緒に呼びました。[]／「たれか童やど知らないか。」／「しらない。」と森は一斉にこたへました。／「そんだったら

さがしに行くぞ〔お〕。」とみんなはまた叫びました。／「来お。」と森は一斉にこたへました。／そこでみんなは色々の農具をもつて、まづ一番ちかい狼森に行きました。

この段階ではすでに狼森という名がついている。森の形が狼に似ていたか、あるいは森の中に狼が住んでいたのかわからないが、いずれにせよ、百姓たちは四つの森を区別するために名をつけたのだ。狼森以外の策森、黒坂森、盗森という名もこの時までについていたにちがいない。

＜みんないっしょに＞尋ね、森が＜いっぺんに＞答えるパターンは前回と変らない。ただ、「童」の行方を知らない森が答えているのはおもしろい。少なくとも、狼森は、自身のところに子どもたちがいることを知っているはずである。とすると、「森」は嘘を言っているのか。それにしては、捜しに行くぞとの言葉に「来お」と答える森の応じ方はおおらかすぎよう。

二年後の秋、百姓たちは、消えた農具の行方を森に尋ねる。

③ みんなは一生懸命そこらをさがしましたが、どうしても見附かりませんでした。それで仕方なく、めい／＼すきな方へ向いて、いつしよにたかく叫びました。／「おらの道具知らないかあ。」／「知らないぞお。」と森は一ぺんにこたへました。／「さがしに行くぞお。」とみんなは叫びました。／「来お。」と森は一斉に答へました。／／みんなは、こんどはなんにももたないで、ぞろ／＼森の方へ行きました。はじめはまづ一番近い狼森に行きました。

三年後の秋、今度は百姓たちは消えた納屋の粟の行方を森に尋ねる。

④ みんなはまるで気が気でなく、一生けん命、その辺をかけまわりましたが、どこにも粟は、一粒もこぼれてゐませんでした。／みんなはがっかりして、てんでにすきな方へ向いて叫びました。／「おらの粟知らないかあ。」／「知らないぞお。」森は一ぺんにこたへました。／「さがしに行くぞ。」とみんなは叫びました。／「来お。」と森は一斉にこた

へました。／みんなは、てんでにすきなえ物を持つて、まづ手近の狼森に行きました。

小森がなにより問題にしているのは④である。ここには氏の指摘どおり、確かに、最後は「いつしよにたかく叫びました」というようなくいつしよに>に類する言葉はない（「声を揃へて」もない）。小森は、三年目の秋の「みんな」に起きた「決定的変化」を示すものとして、「三年目、『四人』の百姓は『てんでに』叫ぶ」ことを挙げているが、これは④の「てんでに」の係り具合を取り違えているのであろう。「てんでに」は①～③の対応個所の使用法から明らかのように、「叫びました」ではなく「すきな方へ」にかかるはずである。まったく同じ語り口のパターンの繰返しで、④だけが別なものにかかるはずがない。④でも「みんな」は当然、いつしよに叫んだのである。第一、百姓たちがばらばらに叫んだならば、森は「一ぺんに」答えられないだろう。こうして①～④を並べてみて感じるのは、いかにくみんな、いつしよ>の原則が貫かれているかということである。

氏はまた、3年目の秋の「みんな」に起きた「決定的変化」と関連付け、農具私的所有、生産物の私的所有を示すものとして③の「おらの道具」、④の「おらの粟」の「おらの」という所有代名詞を強調しているが、この「おらの」という表現には、<他の百姓のものではなく俺だけの>とか、<俺が所有権を持っている>といったニュアンスはない。百姓たちにとっては「みんな」のものは「おらの」もの、「おらの」ものは「みんな」のものでもある。<おらたちの>道具や粟と、もし、彼らがあえて言うなら、その時こそ<おらのもの>と<おらたちのもの>の区別が意識されているのだと考えられる。この一体化した百姓たちにとっては、自分の使う農具、自分の作った粟を<おらたちの>道具、<おらたちの粟>と言うことこそ、不自然である。

百姓たちが一体化しているのであれば、森も一体化している。注目すべきは、捜しに行くぞと百姓たちが言うと、④でも、②、③と同じように、森が「来お」と返していることだ。一見すると、盗人を知っている黒坂森も、盗みの張本人の盗森もしらを切っているように見えるが、④のおおらかな

「来お」の声は、②と③の「来お」と同じ、つまり①の「ようし」と同じものである。森は個々の「形」をもつようになったが、同時に一つのまま、「森」という全体でもある。「童」^{わらし}の行方不明事件、農具消失事件に関しても言えることだが、個別の森には、直接関与したり、事情を知っているものがいようと、全体としては「知らない」のだ。個別の森にははっきりとした意識があるのだが、どうやら＜全体＞として百姓たちに答えているのはそれとは別の、「形」をとらない森の深層意識（阿頼耶識）から湧きあがる善意の声なのだろう。

5.

小森陽一は、百姓たちの世界に「私有財産が発生したからこそ、『盗』という事態が発生することにもなった」と記している²⁵⁹が、「私有財産」が問題になっていないのなら、いったいここでの「盗」とは何なのか。次に『狼森と策森、盗森』の原初の世界の質を見るために、盗森の盗みの問題を考えてみよう。

黒坂森から「おれはあけ方、まつ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た」と聞かされた百姓たちは、その言葉に促されて北へと向かう。そして「松のまつ黒な盗森」まで来ると、「名からしてぬすと臭い」と言いながら、森の中へ入って行って、「さあ栗返せ、栗返せ」とどなる。すると森の奥から、「まつくろな手の長い大きな男」が出てきた。その後の場面を引用すると――

「何だと。おれをぬすとだと。さふ云ふやつは、みんなたゝき潰してやるぞ。ぜんたい何の証拠があるんだ。」／「証人がある。証人がある。」とみんなはこたへました。／「誰だ。畜生、そんなこと云ふやつは誰だ。」と盗森は咆えました。／「黒坂森だ。」と、みんなも負けずに叫びました。「あいつの云ふことはてんであてにならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生。」と盗森はどなりました。／みんなももつともだと思つたり、恐ろしくなつたりしてお互に顔を見合せて逃げ出さうとしました。

百姓たちと盗森、両者にとって盗みの決め手となるのはどうやら、「証拠」と「証人」である。澤田由紀子によれば、盗森がこのように証拠を要求するのは、「盗森自身に、現代〔契約社会〕の論理に通じる考え方の枠」が移入されているからだという²⁶⁾。言い換えれば、盗森は「共同体の論理を内在する存在」として登場してくるということになる²⁷⁾。なるほど表面的にはそうかもしれないが、ここでの最大の問題は、「証拠」と「証人」という言葉の重み（権威）にある。

この「証拠」と「証人」という二つの言葉は『どんぐりと山猫』の一郎の言葉を思い出させる。「このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてゐないやうなのが、いちばんえらい」。「ぼくお説教できいたんです」と一郎は言うが、ここで大事なことは、一郎が、聞きかじりの説教を権威として持ち出しているということである。一方で「このなかでいちばんばかで、めちやくちやで…」などという子どもっぽい言葉遣いは、その権威の威厳を損ない、説教を愉快的な頓知に変えてしまう。翻って「証拠」と「証人」という言葉の使われ方を見ると、盗森や百姓たちはいかめしい言葉を楯にして、ただ勢いづいているだけのように思える。

なにより百姓たちが「証人」の意味を本当に理解できているのか、それが疑わしい。というのも、黒坂森を証人として押し出しても、「あいつの云ふことはてんであてにならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生。」と盗森からどなられるとすぐに、もつともだと納得したり、怖くなったりして「お互に顔を見合せて」逃げ出そうとするからだ。喧嘩腰で詰め寄られて怖気づくのはわからないでもないが、どうして相手の言うことは「もつとも」と感じるのか。ここだけではない。他の場面でも、百姓たちは誰かの意見を聞くと、すぐに「もつともだ」と相槌を打つ。中野隆之は、このなんでも丸呑みして受け入れ、妙に納得してしまう百姓たちに、「主体性」の欠如を見、その時々事情によって態度を変える「ずるさ」を見てとる²⁸⁾が、これは主体性やずるさというより、彼らが子どもっぽいだけではないのか。

加えて百姓たちは、盗森との談判の前に、「名からしてぬすと臭い」から犯人に違いないと踏んでいる。これは、客観性を重んじる証明や証人とい

う言葉とまったく相容れない、非論理的な考え方であろう。何よりおかしいのは、「盗森」と名をつけたのはおそらくは、彼ら自身だということだ。

盗森も、百姓たちと同じくらい子どもっぽい。百姓たちに対して、盗森は「まるではりさけるやうな声」を出し、「叩き潰してやる」だの「畜生」だの、頭ごなしに罵り言葉を連発する。「証拠」はあるのか、「あいつの云ふことはてんであてにならん」などと、ああ言えばこう言う式で言い逃れようとするのも悪ガキ的、場当たりのである。

結局、岩手山が＜証人＞として間に入るることにより、盗森は盗んだ粟を返すことになる。

「ぬすとはたしかに盗森に相違ない。おれはあけがた、東の空のひかりと、西の月のあかりとで、たしかにそれを見届けた。しかしみんなもう帰つてよからう。粟はきつと返させよう。だから悪く思はんで置け。一体盗森は、じぶんで粟餅をこさへて見たくてたまらなかつたのだ。それで粟も盗んで来たのだ。はつはつは。」

盗森のしでかしたことへのおおらかな采配に、百姓たちはあつけにとられる。盗森の黒い男とはいえば、岩手山が「いや／＼それはならん」と「厳かな声」をあげただけで、まだ証言もせぬうちに、もう「頭をかゝへて」地に倒れてしまった。証拠も何もあつたものではない。仲間の黒坂森の証言などはものとしなが、「銀の冠をかぶつて」そびえたつ岩手山が見届けたとなると、もう逆らいようがない。岩手山の言うことはてんであてにはならないと、虚勢を張ることすらできない。どうやら、「現代〔契約社会〕の論理に通じる考え方の粹」など、盗森は棄にしくもないらしい。

盗森による粟の盗みはこうして、岩手山という権威によって裁かれた。盗みは悪いというしごくあたりまえの結論がここから導かれる。しかしこの盗森の盗みを肯定する評者もいるのだ。たとえば中野隆之は、「粟であれ稗であれ、土と水と太陽と全て自然の恵みによってできたもの」である以上、「神」である盗森が「盗む」ことは、「本当は理屈としては通るのだ」と述べている²⁹⁾。言わんとする理屈は理解できるが、なにより盗森は神で

はない。また、盗みとは、他人のものをひそかに自分のものにすることで、それを自然の側に許容すれば、自然と人間の信頼関係は完全に壊れてしまうだろう。問題は＜ひそかに＞にある。相手の了解を得て、自分のものにする、つまり納得づくで貰うのであれば、自然と人間の関係も良好に保たれるのではないか。

さてそれから森もすつかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰いました。／しかしその栗餅も、時節がら、ずみぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまっくろな巨きな巖がおしまひに云つてゐました。

中野は、引用文の中の「きつと栗餅を貰いました」という部分を取り上げ、そこに、人間からものをもらう気弱な森、「人間に飼いなされた動物のような神の姿」を見た³⁰⁾。しかしよく考えてみると、森だけが一方的にもらうわけではない。人間の側も森から木を「貰つて」いるのである（「すこし^{きい}貰つてもいいかあ」）。童話集『注文の多い料理店』の「広告ちらし」には、「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野原や鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらうてきた」と記されている。盗んだわけではない。賢治はもちろん「おはなし」をもらった「虹や月あかり」に感謝している。同様に、この『狼森と笹森、盗森』という物語においても、「貰う」森と人間は、ともに感謝しあっているわけで、中野のように、森を一方的に「飼いなされた」動物にたとえるのはおかしい。

とはいえ、この「貰う」という敬意表現は別の面から見ると、「ともだち」などという言葉遣いと相俟って、＜いい子＞向けのお話調を生み出していることもたしかである。いろいろともめごとがあつたけれど、互いに理解しあつて最後はお友だちになりました。なにも大正期に限ったことではないが、児童物語の多くは、終わりよければすべてよしといった類の甘ったるい教訓的な尻尾をつけている。おそらく、いい子ぶる黒坂森は、あえてこのようなく教訓的な＜大団円で締めくくろうとしたのだ。しかし、「仕方がない」と繰り返すこの物語の終わり方は、黒坂森が意識しなかったある

種のぶきみさを感じさせもする。森と人間の関係がうまく行っていないというわけではない。いや、ぎりぎりではあるが、うまくいっているのだ。しかし「栗餅も、時節がら、ずゐぶん小さくなつた」という言葉によって、読者は原初の昔から、黒坂森の話している〈現在〉へと一気に引きもどされ、人間と自然とのなごやかな原初の風景は一瞬にしてはるか彼方に、遠景に迫りやられる。「貰う」ことに感謝が伴わなくなれば、あるいは「貰う」ことが権利の問題に置き換わってしまえば、いったい自然と人間の関係はどうなるのかと、賢治は無言のうちに問いかけてくる。そのありうべき未来の一つの可能性は、『土神ときつね』の中で鮮やかに示されている。土神は人々から祀られてきたが、狼森や笹森たちとは違い、すでに、誰からもまったく供物をもらえなくなっている。土神はもらう権利があると思っているが、人々の側から言えば、土神にはもはやそんな権利はない。「人間どもは不届だ。近頃はわしの祭にも供物一つ持って来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものはきっと泥の底に引き擦り込んでやらう」と、土神はきりきり歯噛みをして怒りをあらわにする。これはもう、「時節がら」どころの話ではない。『土神ときつね』と『狼森と笹森、盗森』では、扱われる世界の相が決定的に違う。『土神ときつね』の木樵は、土神のことは知っていても、土神の「形」を見ることができなかった（「[木樵は] 時々気づかはしさに土神の祠の方を見てみました。けれども木樵には土神の形は見えなかったのです」）。『かしはばやしの夜』の清作は、権利問題で揉めても、まだ柏の木たちの「形」を見ることができたが、『土神ときつね』の木樵たちには土神のみならず、もはや、森や木の「形」さえも見るができなくなっているにちがいない。

6.

盗森の盗みの問題を別の視点から眺めて見よう。盗森の子どもつぽさについてはすでに触れたが、子どもの盗みを扱った同時代の童話というと、有島武郎の『一房の葡萄』が思い起こされる。続橋達雄は、盗みの行為が「その動機の無邪気さゆえに、あたたかく見られている」物語としてこの有島の『一房の葡萄』をあげ、『狼森と笹森、盗森』との類似性を指摘して

いる³¹⁾。しかし、ここで重要なのはそうした類似性よりもむしろ異質さのほうであろう。

この『赤い鳥』(大正9年8月号)に掲載された物語は、「僕」が友だちのジムから西洋絵具を盗んでしまうという話であるが、これはジャン・バルジャンのような貧しさゆえの盗みではない。絵を描くことが好きな「僕」は、びっくりするほど色の美しいジムの絵具がほしくてたまらなくなって半分無意識的に、盗みをやらかしてしまう。事の次第を知った女教師は、騒ぐ生徒たちを抑え、動揺する「僕」を温かくいたわってくれた。「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っていますか³²⁾」。「僕」が唇を震わせながら泣きだすと、よくわかったらそれでいいと慰め、一房の葡萄を「僕」にくれる。

『狼森と策森、盗森』においてこのやさしい女教師に対応するのは「岩手山」であるが、同じような盗みに対して、両者がまったく違った態度をとっているのがおもしろい。『一房の葡萄』でも盗まれたモノは当然、もとに持ち主に返される。問題は事の収め方だ。「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまってもらわなくてもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい」と先生はにこにこしながら僕たちを向かい合せました³³⁾。—この「にこにこ」には、「上手」に仲直りをさせようとする先生の意図が透けて見える。一方、『狼森と策森、盗森』の岩手山は、盗みに遭った百姓たちに「悪く思はんで置け」と言って、「はつはつはつ」と笑う。「にこにこ」ではない、この「はつはつはつ」というからりとした豪放磊落な笑いこそ、『狼森と策森、盗森』の全体を特徴づけるもの、賢治の真骨頂である。有島の物語にかすかに漂う修身的な道徳の臭みはここにはいっさいない。空気はからりと乾いている。先生の穏やかな微笑はしばらく続くが、岩手山の大笑いはすぐに消え、「またすましてそらを向く」。先生は事件のあと、誰もが傷つかぬようにと、きめ細かな配慮を怠らないが、岩手山は、言うだけのことを言ってしまうと、あとは我関せずで、ひょいと突き放す。

『一房の葡萄』における、「僕」の盗みに対するジムの「いい子」の対応、

「僕」を憎んでいた同じクラスの生徒たちの豹変（まさに先生の意向を汲んだ対応）に比べ、賢治の描く百姓たちの盗みへの対応は実にリアルだ。

みんなはあつけにとられてがや／＼家に帰つて見ましたら、栗はちやんと納屋に戻つてゐました。そこでみんなは、笑つて栗もちをこしらへて、四つの森に持つて行きました。中でもぬすと森には、いちばんたくさん持つて行きました。その代り少し砂がはひつてゐたさうですが、それはどうも仕方なかつたことでせう。

はらいせなのか、それとも魂胆のあるごまかしなのか、盗森への栗餅は、わざわざ砂を「少し」混ぜて数を多くしている。しかも、それは「仕方なかつた」というのだ。『一房の葡萄』の先生なら眉をひそめるにちがいない、こんな非教訓的幕引きは、鈴木三重吉、ひいては大正児童文学の受け入れるところではなかつた。しかし、どちらがいきいきしているかと言えば、断然、賢治の百姓たちのほうであろう。彼らは根に持ち続けるわけではないだろうが、それなりに、こすからく仕返ししているところがなんと子どもっぽく、おかしい。

「砂がはひつてゐたさうです」というのは、誰からの伝聞だろう。盗森から直接聞いたのか。あるいは他の森から間接的に聞いたのか。いずれにしても、盗森が誰かにこぼしている姿が想像される。「さてそれから森もすつかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰ひました」。どうやら子どもの世界でよくあるように、諍いは尾を引かなかつたわけだが、だからといって「仲良き事は美しき哉」ですべて収まるわけではない。

『一房の葡萄』の最後では、「僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです³⁴⁾と、「いい子」になったことが強調されているが、賢治は、このような大人受け、先生受けがするような型にはまった「いい子」や＜立派な生徒＞をよしとしない。盗森が岩手山の言葉で突然、「いい子」になったとは考えにくいし、すでに述べたように、黒坂森も「いい子」とは言いがたい。「それから森もすつかりみんなの友だ

ちでした」という括り方も、聴き手に迎合するような、単純なハッピーエンドを演出しているわけではない。なにより、＜狼森も^レ策森も、盗森も黒坂森もすっかりみんなの友だちでした＞というような、いかにもありそうな列挙になっていない点に注意したい。

ここで重要なのは、狼森と策森、盗森と黒坂森が「みんなの友だち」になったことではなく、それぞれの「形」をもった森が、百姓たちとはじめてことばを交わしたときのように、再び、一体となった「森」に戻されているということだ。狼森や策森だけでなく、盗森も、黒坂森も、共通する深層意識（阿頼耶識）をもったものとして、一つの「森」であることが、改めて確認される。＜みんないっしょに＞ではじまった世界からはじまったなつかしい原初の世界はこうして、もう一度＜みんないっしょに＞に戻る。これは、仲良しになったことを強調し、いい子ぶる黒坂森の意図をはるかに超えた結末である。

賢治はこの物語において、原初の森と百姓たちの交渉を取り上げた。この＜原初＞は、『グスコブドリの伝記』の森の幼い兄妹が過ごしたような＜樂園＞ではない。二人は森に融け込み、自然と和合していた。母がいなくなって捜しまわっていると、「森の樹の間からは、星がちらちら何か云ふやうにひかり、鳥はたびたびおどろいたやうに暗のなかを飛」ぶ。二人は自然に受け入れられ、もう自然の一部、あるいは自然そのものになりきっていた。一方、『狼森と策森、盗森』で描き出された原初の世界は、穏やかで静的な世界ではない。ここでは、はじめての事件が次々と起こる。百姓たちはまさに、ままならぬ自然とぶつかり合いながらも、なんとか折り合いをつけて生きている。赤坂憲雄の言葉を使えば、そこは「稲穂のそよぐ水田や広々とした平地の里」の理想郷ではない³⁵⁾。そこには生きる喜びと緊迫感がある。開拓民たちは、「山と野原の武器」を堅くからだに縛りつけて、「のつしのつし」とやってきた。ここから「侵略軍が他国を蹂躪するような光景」を連想する評者もいる³⁶⁾が、この「のつしのつし」は『なめとこ山の熊』の小十郎が自分の庭のように森を歩く、その自信に満ちた歩き方に通じるものだろう。『かしはばやしの夜』の清作は、画かきから、「何といふざまをしてあるくんだ。まるで這ふやうなあんばいだ。鼠のやうだ」

と罵倒されるが、『狼森と策森、盗森』の開拓民たちは、清作のようにうつむいて歩くことはない。

すでに述べたように、森たちは人間との交渉の中で、命を輝かせ、生きている喜びを感じることができた。人間たちの側からも、同じことが言えるだろう。新たなくはじまり>は驚きに満ち、いつも新鮮で、百姓たちははじまりの出来事に全身全霊で立ち向かってゆく。

このはじまりの地で、百姓たちは男たちも女たちも我を忘れ、「きちがひのやうになつて」働いた。幼い子どもたちがいなくなると、その命を危ぶんで、みんなは「まるで、気違ひのやうになつて」、その辺をあちこちさがす。大事な農具がなくなった時も、みんなは一生懸命そこらをさがす。苦勞して作った粟が納屋から消えると、百姓たちは懸命に、その辺をかけまわる。いいこともあれば、悪いこともある。平坦な道ではないが、どれもこれもみな、はじめての鮮烈な体験だ。彼らは、はじめての体験をくりかえす無垢な子どもである。森の傍らに住むことを許されると、男たちは喜んで手をたたき、顔色を変えて、しんとしていた女や子どもたちは、とたんにはしゃぎだす。子どもたちはうれしまぎれに喧嘩をしたり、女たちはその子をばかばかなぐる。落ち着きを求める理性は吹っ飛び、体が直接反応してしまうのだ。荒々しい、その溢れんばかりの豊かな感情はもう、「すまふをとつておしまひばかばか撲りあつたりしてゐる」なめとこ山の熊の子と変わらない。新しく掘り起こした畑で、穀物を収穫できた時の喜びも、尋常ではない。新らしい畑がふえ、小屋が三つになった時には、あまりの嬉しさから、大人までがはね歩いた。<はじまり>の世界では森も人間も同じように命を燃焼させる。邪気がないことが条件だが、欲望も執着も排除されていない。よく描かれる理想世界（たとえばドストエフスキイの人類の「黄金時代」）では<嘘>や盗みは禁忌で、それらが入り込んでくると、たちまちのうちに黒い染みとなって拡がり、世界は汚れたものになってゆく。無垢から汚れ（罪）へとまっすぐに堕ちてゆくその運動線が、ドストエフスキイたちのキリスト教的な歴史観をかたちづくる。賢治は世界をそれとは違うものとして捉えた。彼の描く原初の世界では、嘘や盗みでさえ、<はじめての邪気のないもの>として排除されない。樂園では時間が消え

るが、ここに描かれているのは時間の流れる原初の動的な無垢な世界だ。その意味でそこ一狼森や盗森と共生する世界—はエデンの園のような楽園ではないけれども、生命が躍動している世界、賢治の「広告ちらし」の言葉を用いて言えば、「罪や、かなしみでさへそこでは聖くきれいにかなやいてゐる」原初の＜子どもの＞世界である。

谷川雁は『狼森と策森、盗森』を取り上げ、「この世でもっとも辛苦にみちていると言ってよい寒冷地の高原開拓が、こんなに甘美な絵巻物に変わるのは、幼年のひとみの魔法である³⁷⁾」と述べている。じつに含蓄のある指摘であるが、「辛苦にみちている」はずの開拓が魔法によって「甘美」になったわけではない。辛苦や苦難と喜びは別物ではない。賢治は、苦難そのものが喜びであるような世界の＜はじまり＞の世界を、人生の＜はじまり＞である子どもの世界から類推、想像し、子どもの感覚で描き出したのである。

注

- 1) 西成彦『〔新編〕森のグリタ 宮沢賢治』平凡社、2004年、50頁。
- 2) 同上、52頁。
- 3) 澤田由紀子『『狼森と策森、盗森』考 栗餅の力をめぐって』（赤坂憲雄、吉田文憲編・著『注文の多い料理店』考、五柳書店、1995年、所収）、75頁。
- 4) 同上、73-74頁。
- 5) 谷本誠剛『宮沢賢治とファンタジー童話』北星堂書店、1997年、69頁。
- 6) たとえば佐野美津男は、「この四人の子どもをかどわかすという行動によって狼森の＜形＞が出てくる」と記している（『宮沢賢治の童話を読む』辺境社、1988年、238頁）。
- 7) 傍点は筆者。以下、下線も含め、強調はすべて筆者のもの。
- 8) 『〔新編〕森のグリタ 宮沢賢治』、95頁。
- 9) たとえば小森陽一は、黒坂森が「形」を出さないのは、「コミュニケーションをもとうとしない自然の在り方をまもらうとしている」からだと述べている（『最新宮沢賢治講義』朝日選書、1996年、71頁を参照）。
- 10) キューストの言葉については、拙著『宮沢賢治とは何か』（朝文社、2014年）第5章「大人の中の＜内なる子ども＞」を参照されたい。
- 11) 『祭りの晩』では、山男は団子二串に十銭を支払った。ちなみに祭りの見世物の木戸銭も十銭であった。亮二は祭りに行くのに、小遣いを十五銭もらっている。
- 12) 詳しくは、拙稿「宮沢賢治とく礼儀作法」—『どんぐりと山猫』をめぐって（海上保安大学校『研究報告』第60巻第2号、2016年3月）を参照されたい。

-
- 13) おそらくこの執着心は、唯識思想という末那識に近いものなのだろう。谷本誠剛は「人との交わりの中で、森もまた自分の命が始まることを喜こんだ」と述べているが（『宮沢賢治とファンタジー童話』、63 頁）、命の始まりにおいて、執着心と喜びは切り離しがたいものである。
- 14) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』、55 頁。田中末男も小森の見方を踏襲して、狼たちと山男の笑いに「シニカルな態度」を見て取る（田中末男「宮澤賢治と環境思想（1）『狼森と笹森、盗森』の研究」『朝日大学一般教育紀要』34、2008 年 1 月、16 頁）。
- 15) 狼や山男の〈笑い〉に自然による人間への批判を読みとるのは、『どんぐりと山猫』のおしくらまんじゅうが上手だなどと自慢するどんぐりたちの姿に、他と比較することへの非をあげつらう教訓を読みとるのと似ている。どちらも、もっともらしい図式や教訓に合わない細部は、無意識のうちに切り捨てられるのだ。
- 16) レヴィナス、合田正人・谷口博史訳『われわれのあいだで』法政大学出版局、1993 年、18 頁。
- 17) 別役実『イーハトボゆき軽便鉄道』白水社、2003 年、116 頁。
- 18) 西成彦『〔新編〕森のゲリラ 宮沢賢治』、132 頁。
- 19) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』、55 頁。
- 20) 澤田由紀子「『狼森と笹森、盗森』考 栗餅の力をめぐって」、73-74 頁。
- 21) 同上、74 頁。
- 22) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』、72 頁。
- 23) 続橋達雄「盗森の盗み」（続橋達雄編『注文の多い料理店』研究Ⅱ』学藝書林、1975 年、所収）、62 頁。
- 24) 小森陽一『最新宮沢賢治講義』、69 頁。
- 25) 同上。
- 26) 澤田由紀子「『狼森と笹森、盗森』考 栗餅の力をめぐって」、81 頁。
- 27) 同上。
- 28) 中野隆之『宮澤賢治童話作品論集』葦書房、1996 年、90 頁。
- 29) 同上。
- 30) 同上、92 頁。
- 31) 続橋達雄「盗森の盗み」、62 頁。
- 32) 有島武郎『一房の葡萄』（桑原三郎・千葉俊二編『日本児童文学名作集』（下）、岩波文庫、1994 年、所収）、61 頁。
- 33) 同上、60 頁。
- 34) 同上、61 頁。
- 35) 赤坂憲雄『東北学／もうひとつの東北』講談社学術文庫、2014 年、37 頁。
- 36) 田中末男「宮澤賢治と環境思想（1）『狼森と笹森、盗森』の研究」、9 頁。
- 37) 谷川雁『賢治初期童話考』潮出版社、1993 年、55 頁。

※賢治作品からの引用はすべて、筑摩書房版『新校本宮澤賢治全集』に拠る（ただし、ルビに関してはこの限りではない。また明らかに誤植と分かるものは訂正して引用した）。